



2009年度 札幌地区使徒職大会の開催 「使徒職に招かれた喜びを人々に伝えよう」



札幌地区使徒職大会が10月4日（日）に札幌市の藤学園講堂で開催されました。当番教会は手稲教会で参加人数は800名でした。まず、札幌地区長の勝谷太治神父から地区の宣教ビジョンに関する講演があり、続いて地主司教司式のミサで日程を終えました。

講演『使徒職に招かれた喜びを人々に伝えよう』

地区長 勝谷太治神父

1. 生活の中で証しする使徒職

信徒における使徒職で、まず大事なものは「福音宣教」です。しかし、多くの人は「福音宣教」と聞くと後ろめたい気持ちになるの



ではないでしょうか。「口下手だから」「聖書や要理についてよく知らない」言い訳はいろいろあるでしょうが、そう思っている人は勘違いをしています。聖書や要理を教えることは信徒に求められていません。

信徒に求められている福音宣教とは、一言でいえば、身近なところで神様の愛を実現させることです。そこから広い意味の福音宣教、すなわち直接み言葉を伝えるのではなく、よりよい社会を築くためにいろいろな社会活動に参加することも福音宣教と考えられます。しかし、仕事や家庭の事情でそのような活動に参加できない人は、やはり後ろめたさを感じてしまうでしょう。でも、私たち信仰者は死ぬまで神様の愛によって刷新され続けるよう召されています。神様は決して私たちに無理なことを要求しませんが、常に自分の限界を超えて愛に向かって開いていくよう促しています。一般論を伝える福音宣教ではなく、日常生活の中で、あなたにしかできない福音宣教に招かれているのです。

2. 第二バチカン公会議後の教会観の変化

信徒の使徒職を理解するためには、教会観の変化を知っておく必要があります。公会議前では、長年信徒の使徒職が無視されてきました。本来信徒にあるべき使徒職でさえも司祭本来の役務であるかのように考えられてきました。それが見直されたのが第二バチカン公会議においてです。司祭が減ったから見直したのではなく、教会の本来の姿を取り戻そうということで、信徒の使徒職が見直されたのです。

公会議前の教会のイメージは、目に見えない天国を地上に現す「完全な社会＝神の国」が教会で、神の恵みは司祭を通して信徒に分配されるものでした。信徒は教会の典礼と秘跡に与ってその恵みをいただいていたといえればよかったです。

公会議後の教会のイメージは、神の国は教会ではなく「世界全体」を意味します。教会の使命は「神の国」（世界）に奉仕する奉仕者になることです。教会が発展することが目的ではなく、世界が「神の国」になることが目的です。教会の中にいる人が救われるのではなく、福音が地上に実現し、世界が救われることが目的です。「教会」すなわち私たちはそのために「福音」を携えて奉仕するために召されているのです。



3. 司祭中心の教会から信徒中心の教会へ

信徒こそが福音宣教の主たる担い手であることを述べてきましたが、現実の教会をみるとまだまだ司祭中心に運営されており、信徒はその指示によって

動くアシスタントの役割というところが多いように見受けられます。教会をどう運営していくかという共通のビジョンが教区や地区にないので、小教区の運営はその時の主任司祭のやり方に依存しています。主任司祭が替わるたびに教会の運営方針が変わり、教会の雰囲気さえ変わってしまうことが多いのです。

これは本来あってはならないことです。しかし、多くの教会は何についても司祭の決済と指示を求めます。司祭に依存することは、自分たちが責任を取りたくないことです。そして、不満があっても、それは決して司祭の耳に入らない不平のつぶやきとなり、やがて教会を影で支配する妖怪となるのです。

司祭はオールマイティではありません。教会運営で生じる全てのことに適切な判断を下せるわけではありません。信仰における重要な事柄や、典礼や秘跡の本質的な事にかかわること以外は、信徒が自分たちで責任を持って考えて決めていくべきです。最終的な責任は主任司祭が負いますが、信徒が共同体として責任を持って向かうべき方向性を自分たちで選択し、実行していくことが大切なのです。



4. 宣教の熱意はどこから得られるか

自分を超えてチャレンジしようという力と勇氣は共同体体験から得ることができます。私自身、学生時代にリバス神父を中心とした7、8人のグループでの分かち合いで自分を超えて進んでいく力を得ました。一人では決して行こうと考えなかったところ

へも、心が通じ合う仲間とならば出かけてみようという気になります。当然、そこでは、喜びと希望に支えられている実感が伴います。宣教に出かけた弟子たちが体験したのはまさに共同体体験だったのでしょう。

これから小教区が宣教共同体となるためには、この信仰を分かち合える共同体が効果的に小教区に位置づけられるかどうかにかかっています。しかし、札幌地区では共同体づくりが進んでいません。「分かち合い」に誤解されたイメージが定着しているからです。

まず、地区集会や家庭集会で身近な信仰生活や教



会の事柄について打ち解けた雰囲気でも語り合うことです。そのような語りを通して、一人ひとりが生き生きと教会活動や宣教に向かうようになるのが目的です。そして、信仰面のとどまらず日常生活においても助け合い支え合える共同体となることも大切なことです。地域社会でのきめ細かい活動は、司祭にはできない信徒固有の宣教司牧活動といえます。

5. 札幌地区の未来像

今後、司祭の減少や高齢化により、現在の小教区の体制を維持することは難しく、小教区の統廃合は避けられません。人材を結集して効率的な宣教体制を構築すべきと考えます。司祭不在の小教区が増えています。司祭がいなくなっても教会がなくなることはありません。むしろ、信徒中心の宣教共同体として役割が重要になります。信徒による入門講座や生涯養成、地域での司牧的活動などが求められています。そのためにも、小教区の中に小共同体（家庭集会）が効果的に位置づけられることが必要です。そのようにして、統廃合後も今の小教区は変わらず教会活動を続けていけると考えています。

宣司評スケジュール

11月7日(土)

養成常任研修会 10:00~

講師 カルメル会 中川博道師

北11条教会

「祈りはわたしの人生を変えた」

~キリストとの出会いである祈り~

11月28日(土)・29日(日)

女性研修会(1泊2日)

北広島クラッセホテル

参加費 8,000円(宿泊代を含む)

※ 29日(日)は北広島教会の主日ミサにあずかります。

11月12日(木)

企画推進会議 北11条教会 18:30~

12月10日(木)

企画推進会議・各委員会部会合同会議

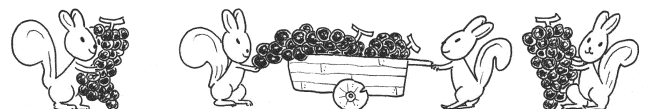
11月23日(月)

一日研修会 北11条教会 9:50~

講師 京都教区長 大塚喜直司教

「共同宣教司牧について

京都教区の歩み」



各ブロック会議の報告

西ブロック

札幌地区のブロック再編に伴い、西ブロックも手稲、花川、小樽富岡、小樽住之江、倶知安の5教会が協力することとなった。

最初に小樽富岡教会に集まった各教会と司祭たちは何から手をつけていいのか暗中模索の状態だったが、話し合いの中で、前西ブロックでやりかけていた合同堅信式から取りかかろうとの話が出て、現在、11月8日の日曜日に小樽富岡教会を会場に5教会合同で堅信式を実施するために準備を進めている。ブロック会議も3回開催されて、会議の場所を持ち回りにして、会場教会を司会担当にして、次回会場教会を書記にすることにしている。実際に各小教区に出向くことで分かることも多い。地道な議論とやれることをやることで、西ブロックはしだいに協力体制が確立されてきている。

(花川教会 真島 勝彦)

東ブロック

東ブロックは本年3月迄、月寒・小野幌・大麻・江別・岩見沢の5小教区で交流を続けていましたが、6月に行われたブロック会議から新田が新たに加わり、Bグループとして新たに加わった北広島・恵庭・千歳の3小教区もブロック会議に参加し、9小教区によるにぎやかな集まりとなりました。

9月6日に岩見沢教会で開催されたブロック会議では(ブロック会議は3ヶ月に1回行われています)恵庭教会で雀蜂の巣が発見され除去したローカルな話題も提供され、大いに盛り上がりました。

メンバーの各小教区の担当地域は、合計すると、石狩支庁の東部・北部・南部、空知支庁の南部を占め、地図で見ると、なんと広大な地域だろうと改めて感動を覚えるのです。

小教区の規模も、環境も異なりますが、ブロックとして一体感を持ち、助け合い、力を出しあって行こうと方向性は定まっています。

その手始めの一つとして、経済的な問題について、来る10月31日小野幌教会において、臨時のブロック会議が持たれることとなりました。

具体的な議題の煮詰めはこれからになりますが、たとえばある小教区が聖堂の新改築を計画し、資金に不足を生じた場合、どのように対処すべきについて、その小教区だけでなく、ブロックとして一体となって考え、検討してはどうか? といった事も重要な議題になると思われます。

本来は教区として、又は地区として検討すべき問題だとは思いますが、その手始めとしてブロックで話し合うことも意義がある事だと思われます。

討議の結果が出ましたら、報告の機会を持つべきだと考えています。

(文責 水上 泰助)

中央ブロック

イ) 教会維持費について

問題点と現況について話し合われました。

ロ) 堅信式について

- ・南地区(円山、真駒内、山鼻)、北地区(北1条、北11条、北26条)に分ける。
- ・勉強会は各教会にて行う。
- ・2年に1度行ってはどうか(他教会、学校からも受け入れる)。
- ・今年は南地区で実施(式教会は山鼻)

ハ) 小教区のブロック制について

各教会から問題点と良い点を発言してもらいました。

問題点・男性の働き手が少ない。

- ・区域の再編をしたがあまり変わりはない。
- ・若者、ヨゼフ会が見えない。
- ・並列であるため、他のブロックとの交流が少ない。
- ・信者数が多いため、居住区で分けていないので、ブロック制は不可能。

良い点・福祉部を廃止し、ブロックに任せ、隣人ネットワークが充実し、幅の広い状況の把握が出来るようになった。

- ・A, B, C, Dブロックがあるが、2ブロックで合同の会をした。
- ・掃除に男性の参加が増えた。
- ・2008年からブロック制になり、月に1回集会をしている。
- ・ブロック持ち回りで1年ごとに運営委員長を決めている(選出しやすくなった)。
- ・ブロック交替でコーヒーショップを毎週実施し、会話の輪が広がった。

二) その他

真駒内教会から葬儀の手伝いの交通費について質問がありました。

※ 次回 11月15日(日)午後2時~

真駒内教会

(山鼻教会 植村 録一)

えぞキリシタン殉教370周年記念行事

えぞキリシタン展の開催

“埋もれた歴史に、いま光を！”

○えぞキリシタン展 7月18日（土）～20（月）

於：北11条教会

○千軒岳巡礼登山 7月26日（日）

昨年、日本のカトリック教会はペトロ岐部ら188殉教者の列福を盛大に祝いましたが、北海道においても殉教の歴史が刻まれております。えぞキリシタン殉教370周年にあたり記念行事を計画しました。このような殉教者の記念行事とはかく「顕彰」とか「遺徳を讃える」ものになりがちですが、開催の主旨として当初から2つの方針を定めました。

その第1は、忘れ去られつつある「えぞキリシタン」の出来事に、今一度、歴史的な研究の光を当てたいということです。えぞキリシタンを研究してきた諸先輩方が高齢になり退かれつつある中で、もう一度えぞキリシタンの歴史をカトリック教会として掘り起こしてみたいと願いました。第2の目的は、キリシタン殉教の歴史を宣教の視点でとらえかえし、現代の私たちのへの新しい福音のメッセージとして再評価することです。

開催3日間の来場者は800名、殉教記念ミサも聖堂を埋め尽くすほどの盛況でした。貴重な資料を貸し出してくださった当別トラピスト修道院様、伊達カルメル修道院様、岩内郷土館様、京都フランシスコの家・資料館様、専門家としての助言を与えてくださった泉隆様、羽田野六男様、そして「殉教記念ミサ」を捧げてくださった地主司教様、地区長として支えてくださった勝谷神父様、会場を提供くださった北11条教会と長尾神父様に心から感謝いたします。



展示会場



殉教図と子育て地藏



展示物（踏絵）



殉教者記念ミサ



巡礼登山での儀福さんの洗礼式

2009年 平和を祈る40日間 「平和の使徒として働くために」

札幌地区宣教司牧評議会・平和旬間実行委員会

今年も、日中戦争開始の7月7日（1937年）から終戦の8月15日（1945年）までの40日間を、平和について学び、考え、祈り、行動する期間として、上記のテーマで諸行事を行いました。以下に、平和講演会、平和祈願ミサ、平和行進について報告いたします。

平和講演会 平和の語らいとオルガンの調べ 8月8日(土)15:00~17:00 カトリック北一条教会
「夫婦で語り合う戦争と平和」

講師 太田 一男さん（酪農学園大学名誉教授）
太田 結子さん（日本ネグロスキャンペーン委員会北海道代表）
（お二人とも日本キリスト教団野幌教会所属）

オルガン 大野 敦子さん
（北一条教会オルガニスト）
参加者 50名

オルガン演奏

講演会は大野敦子さんによる演奏で始まりました。バッハ「目ざめよとよぶ声が……」、トッカータとフーガニ短調、ポエルマン「聖母への祈り」が演奏され、参加者は心しずかに聴き入っていました。

太田結子さんのお話から

4歳のときマニラへ行き、日本人小学校で学びました。日本はいい国、美しい国と思っていましたが、日本軍が暴虐のかぎりをつくすのを見て失望しました。やがて戦火をのがれてルソンの山野をさまようことになります。母と二人で沼にはまったときは、もうダメと思いましたが、木につかまりやっと生きることができました。

15歳のとき戦禍のいえぬ日本へ帰ってきました。看護学校を卒業後、岡山、京都、トルコ共和国などで働きましたが、結婚を機に北海道へ来ました。

戦争とは死の商人がおこすものだと思います。そして貧富の差がおこすものだと思います。戦争を体験した子供達が大になつたらどんな生き方をするのでしょうか。内戦の地の少年兵の悲劇をどう思いますか。

日本ネグロスキャンペーン委員会北海道にかかわってきました。情報がな

ので知られていませんが、イスラム解放戦線とフィリピン国軍とのあいだで今だに戦火が絶えないのです。フィリピンの現状を知って、自分達のできることを勇気をもって行いたいと思います。「平和」を辞書で引くと、戦争がなく安全なこととありますが、私は「人間らしく生きる」ことが出来ることだと思っています。



夫婦でトークより

太田一男さんのお話から

戦争の悲惨さを思うと、戦争をしないことに対してはだれも反対しません。しかし軍隊がなくてもやっていけると思う人は少ないでしょう。軍隊とは国民を守らないのです。軍隊（自衛隊）は国家を外からの攻撃に備えて守るだけでなく、一般の警察力で秩序・治安の維持が困難になった場合に国民から国家を守る組織なのです。

日本国憲法は「権力の非武装」を定めた、「権力非武装国家」の憲法です。経済、情報、文化などすべての分野でグローバル化が進んでいる状況下では「武力侵略」や「武力占領」は意味を失いました。国をベースとして考える戦争とか平和の時代ではなくなったのです。「テロ」の恐怖を植えつけなければ軍拡経済ができなくなったわけです。

力の論理による「秩序」維持は平和や安定を生みだしません。武力では何も解決しません。軍隊は巨大な消費機構で、環境を破壊し、人間性を破壊し、「負の文化」を生みだします。暴力の連鎖を断ち、地球の有限性を知り、浪費を慎む文明へ向けて歩み出さねばなりません。軍隊をもたない国づくりをす



るべきなのです。

「沖縄での体験」、「戦争体験を伝えること」、「経済構造や軍隊と警察のちがいをもっとやさしく書いて!」、「丸腰の国コスタリカ」など日ごろ感じていることや、互いの要望などが話されました。とり組んでいることは異なっているけれども、お二人は互いにささえ合っていることが感じられました。

「テロが生み出される背景は?」の質問に「貧富の差です」と答えられたのは印象的でした。地下鉄事故の影響なのか参加者が少なかったのは残念なことでした。

平和祈願ミサ 8月15日(土) 18:00~19:00

カトリック北一条教会

司式 地主 敏夫司教 司祭団 参加者200名
地主司教は説教で

「月観測衛星かぐやから見た地球は美しく、生命体にふさわしいと思います。しかし地球上ではひどいことが行われています。いつも戦火がおさまることなく、核兵器を数万発もかえ廃絶はむずかしいのです。多くの生物種が絶滅の危機にあります。人間が地球を破壊しているからです。

イエスはあなたがたに平和を与えと言われました。平和を願いましょう。しかし平和は待っていてもこないのです。かちとる行動でなければなりません。地球が生命体にふさわしいものでありつづけるよう、互いに祈り、つとめていきたいと思います。」と呼びかけられました。



共同祈願では、マリア院、働く人の家、正義と平和委員会、虹の会、うえるかむはうす(タガログ語と日本語)から祈りがささげられ、一同「キリストの平和」で唱和しました。

ミサ献金66,871円は「日本ネグロスキャンペーン北海道」へ送りました。

終わりに、札幌キリスト教連合会・信教の自由を守る委員会からのメッセージが読みあげられミサを終了しました。

折り鶴奉納先

広島平和公園原爆慰霊碑

手稲、江別、岩見沢、月寒、新田、26条、富岡、北一条、花川、円山、北見教会、花川マリア院、他2本。

長崎平和公園原爆慰霊碑

小野幌、北11条、北一条、富岡、真駒内、新田、山鼻教会、パクス・クリスティ。



平和行進 8月15日(土) 19:20~20:20

参加者120名

ミサ後、教会から大通公園まで、ペンライトをもちプラカードをかかげながら行進しました。憲法9条は世界の宝だ! 自衛隊を海外に派兵するな! アジアから軍事基地をなくそう! 地上から核兵器をなくそう! などのシュプレヒコールで平和を訴えました。

若い人、子供、司祭、シスター達の参加も多く、青年や神学生の力をかりることが出来ました。

行進後、公園3丁目ですプロテスタントの皆さんと合流し、祈りの交流をもちました。

「フランススコの平和の祈り」をし、賛美歌・「勝利をのぞみ」を歌いながら平和を願いました。握手のうちに20時35分解散しました。

毎年、8月6日、9日、15日に「平和の鐘」のおすすめをしていますが、今年も多く教会で「鐘」とともに祈りのひとときがもたれました。

今年も、北一条教会の皆様はじめ多くの方の協力をいただきました。ありがとうございました。



(平和旬間実行委員会 松井 洋治)

東ブロック合同サマースクール 報告

神学生 神能 和己

7月29日～31日までカトリック小野幌教会にて、大麻・小野幌・北広島・月寒・岩見沢・千歳の各教会の子供たち25名と14名+αのリーダーが集まり、合同サマースクールが開かれました。

毎年、各々の教会学校で行われていたサマースクールとは違い、いつも教会で顔を合わせる仲間以外との新しい出会いはこの合同サマースクールの大きな利点だったと思います。

今回のテーマは「信仰の歴史をうけつぐーキリシタンに学ぶー」という一見難しそうなテーマでしたが、上杉神父様の「ペトロ岐部と188殉教者」の講話では単に話だけではなく、森田神父様を交えた寸劇を用いて解りやすく丁寧に話していただきました。

また、新海神父様の「蝦夷キリシタン」の講話ではキリスト教迫害時代に用いられた踏み絵やマリア観音像などの遺物を実際に子供たちの手に持たせ、当時の人々がいかに信仰を守っていったかを「聴く・観る・触れる」の三本柱で子供たちの心に直接伝えておられました。

他にも野外学習として、北海道の文化に触れる為、近くにある野幌開拓の村まで加藤神父様を交

えて皆でハイキングをし、広大な敷地にある様々な開拓初期の建物を見学しました。

また、江別にある北海道立埋蔵文化センターでは縄文時代、すでに北海道に住んでいた人々の生活を土器や石器などを通して知る機会をいただきました。

ここでは無料体験としてアクセサリーにもなる勾玉を作らせていただけるのですが、子供たちは大変気に入ったようで一人ひとりが黙々と勾玉づ

くり励んでいました。

バーベキューや花火、レクレーションなど、他にも盛りだくさんな三日間でしたが、「遊ぶ・学ぶ・交流する」が十分に織り込まれたとても良い三日間でした。

次回、この合同サマースクールがどの

ようなカタチになっていくかはまだ分かりませんが、今後はもっと多くの子供たちに来てもらえるよう、私も出来るだけお手伝いさせていただきたいと思います。

最後に今回、このサマースクールにご助力してくださった全ての方々へ

本当におつかれさまでした。



編集後記

使徒職大会が終わりました。私たち一人ひとりが‘喜びに満ちあふれた姿’そのものが「福音宣教」であると感じました。さまざまな問題はありますが、日々すでに頂いている恵みに感謝し、いつも喜んで、祈りのうちに笑顔で過ごすことから始めたいですね。

(M・T)